

審査結果の要旨

氏名 榊原 哲也

榊原哲也氏の博士号申請論文『フッサール現象学の生成 —その方法の成立と展開—』は、フッサール現象学の基盤をなす方法概念に焦点を当てながら、それが、どのように形成され展開していったのかを、文献的に丹念にたどり、明らかにしようとしたものである。フッサール現象学の方法は「現象学的還元」とよばれる。これまですでにこの「現象学的還元」に関しては無数の文献学的研究が発表されてきたが、この方法の成立と展開をフッサール哲学の最初期から最晩年期に至るまで全体にわたって首尾一貫した形で解釈して見せた研究はほとんど見当たらない。その意味でこの榊原氏の研究は、国際的視点から見ても、フッサール研究の歴史に大きな一歩をしるすものといえるだろう。

本論文は、三部構成で、第1部が「フッサール現象学の誕生と方法の成立」、第2部が「静態的現象学から発生的現象学へ」、第3部が「発生的現象学の方法論」である。

第1部においては、「現象学的還元」という方法の成立過程がまず文献的に丹念にたどられる。現象学的還元が成立するのは、記述現象学の立場の『論理学研究』から超越論的現象学の立場で書かれた『イデー I』に至るまでの期間であるが、榊原氏はこの期間に書かれた多くの草稿を手掛かりにして、現象学的還元の成立がもう一つの方法概念である本質直観という方法と密接な関係にあることを描き出す。榊原氏によると、フッサールは『イデー I』では、世界が存在しない可能性のもとでも、「世界についての」意識の方は成立し続ける可能性があることを根拠にして「還元」の可能性について語っており、このような本質直観にもとづくデカルト的意識観が現象学的還元の方法の成立に決定的な影響力を持っていたことが示されるのである。

第2部においては、『イデー I』に続いて書かれながら生前には公刊されずに終わった『イデー II』の複雑な成立史が明らかにされる。この課題に取り組むために榊原氏は、公刊されたテキストとは別に、もとになった二つの未公刊草稿の復元を試み、それによって、この『イデー II』の原稿を仕上げるフッサールの試みのうちに、現象学的還元が、静態的見方から発生的見方へと変化していくきっかけを見出していることを明らかにする。この研究は、フッサール文庫に残された未公刊の草稿を見出し、解釈することによって可能になったものであり、榊原氏の文献研究の最大の成果の一つといえるだろう。

第3部においては、『デカルト的省察』第五省察、最晩年の遺稿、さらには、いわゆる後期時間論草稿をもとに、フッサールの後期時間論が、いわゆる「生き生きした現在」を主題化しながら、いかに展開されたのかがたどられ、それによって、フッサール現象学の方法論が、認識論および存在論を総合した新たな見方へと変貌していく姿が、ここでも文献に即して丹念に描かれる。

本論文は、基本的に文献学的手法で、議論を展開したものであり、その点で、哲学的な観点からすれば、未消化で、内容的に不分明と思われる箇所も散見される。しかし、これまでの研究のなかでは依然不明瞭なまま安易に語られていたフッサール現象学の多くの発展史的な局面が、テキストに即して明確になったという成果は、刮目に値する。

よって、審査委員会は、本論考が博士（文学）の学位を十分に授与しうるものと判定する次第である。